

D'ORTSCHY-ZEN INSTITUTE
Dharma-Letters, Essays and articles
In japanese

Brigitte D'Ortschy



Bei sämtlichen hier angebotenen Texten handelt es sich um Original Manuskripte von Brigitte D'Ortschy (KOUN-AN ROSHI). Mit Absicht wurden die handschriftlichen Verbesserungen und Ergänzungen der Autorin belassen um die Authentizität der Manuskripte zu bewahren. Es handelt sich dabei um unveröffentlichtes Material, das hier zum ersten Mal der Allgemeinheit vorgestellt wird.

Impressum:

© WolkenVerlag 2010
Herausgegeben von Monica Maurer
D-82031 Grünwald
Dr.-Max-Str. 17

Alle Rechte vorbehalten

Die Inhalte dieser Publikation, der Website und sämtlicher Downloads sind rechtlich geschützt. Ohne schriftliche Genehmigung seitens des WolkenVerlags darf der Inhalt in keiner Form reproduziert oder unter Verwendung elektronischer Systeme verarbeitet, vervielfältigt, verändert oder verbreitet werden, es sei denn, Gegenteiliges wäre ausdrücklich vermerkt.

- 01 Transmission, Ancient and Contemporary**
- 02 SEEKING ZEN IN JAPAN**
- 06 SAN – UN Zendo HASANSAI 28.10.1973**

Transmission, Ancient and Contemporary

Brigitte D'Ortschy, KOUN-AN

© WolkenVerlag 2010

歴代の禅老師のおかげで、釈尊の崇高な道は今日まで生き続けている。

公案によって、指導と伝承の方法と手段にも洞察が出来る。菩提達磨は中国皇帝武の理解を得なかったとき、少林寺に行つて、そこで九年間座り続けた。禅を広げるための外的な行動はなくて、あったのはただ内的道の力への信頼だけであつた。慧可が菩提達磨の所に来て、指導を乞うた時でも、彼は慧可をすぐには受け入れなかつた。慧可の忍耐や決心を厳しく試して、そして慧可を彼の所に導いた深い衝動に納得して初めて、菩提達磨は慧可を受け入れた。結局、菩提達磨のもとで六年間修行をした後、慧可は中国の二祖として認められた。菩提達磨の死後、慧可は暫くしてから、禅の世界から遠ざかつて、ある時期庶民の中で生活するために師のもとを去つた。そして、その後やっと一定のところに定住して、弟子を大勢受け入れた。

中国は、このような高水準の伝承を受けることができ、誠に運がよかつた。かなりの数の偉大な老師が次から次へと現れ、その中で多分一番偉大だつたのは六祖慧能であろう。

慧能は、他の人を指導するために衣鉢を継ぎたかつたのではなかつた。五祖は慧能の優れた精神的深さを察知し、あらゆる現実的な考え方を無視して、自分の後継者として彼を任命した。後継者になることを熱望したみよう？を任命する方が、どんなに容易で實際的だつたであろうか。五祖は、しばらく身を隠すように慧能に注意さえしなければならなかつた。それは結局十五年間にも及んだ。第五祖は焦りを知らなかつたし、功利主義的な考えにも動かされなかつたらしい。あつたのはただその内的道への信頼であつた。明らかに、五祖の決心は完全に報われた。

南嶽懷讓は十五年間、六祖の素晴らしい指導を受けて修行した。深い見性に達するまでに八年間かかつたといわれている（盤珪参照）。

南陽慧忠の話も聞いている。彼は長年第六祖の弟子であつて、法の継承者として任命されてから、四十年の間孤独な生活をし、その後皇帝に呼ばれて、高齢でやっと人々を指導することに同意した。そしてかれは忠国師としても知られている。

南泉普願の話も聞いている。彼は印可証明を受けた後、かなりの間孤独に暮らしながら、人々を指導し始めた。その中の一人には傑出した趙洲もいたという。

聞くところによると、趙洲從念は十八歳の時の最初の突破の後、南泉禪師のもとで四十年間修行し、そしてさらに二十年間にわたつて、中国中の老師と問答を交わしながらそれを続けた。六十年の修行の後、弟子を導く覚悟ができたので、趙洲に定住した。彼の「無」という公案は世界的に有名になり、それ以来何千人もの突破に貢献した。この偉大な老師に謹んで尊崇と感謝を捧げたい。

無門関の著者である無門慧開の話も聞いている。彼はこの「無」という公案だけで六年間もかかり、辛苦の修行のすえ悟った。

イ山靈祐は偉大な老師の百丈懷海のもとで二十年間修行して、深い悟りを開いたと聞いている。任命され、新しい寺を設立するように指示されたとき、ただその山に行って、七、八年間全く一人で小さな小屋で座り続けた。老師の提唱の中で、「勿論、宣伝しようとしなかった」と書いてある。焦りは全くなく、ただあったのは内的道への信頼であった。その後、イ山禪師の住んでいる所に寺が出来たとき、大勢の人の中の一人に、教養のある香巖も指導を願いにきた。香巖はイ山の「父と母が生まれる前の顔を見せろ」という要求に返事が出来なくて、経文と解説の中で無益に答えを捜した結果、またイ山の所に戻って、教えを乞うた：「答えが分からない。どういう返事か、教えて下さい。」イ山曰く：「自分にとってはは貴方に言うのは決して難しくはないが、もしそうしたならば、貴方は後で私を非難するに違いない。」

暗示も、説明もなかった。香巖はがっかりして去り、小さな庵に住み始めた。その後徹底的な悟りを体験したとき、イ山に深く感謝し、イ山の方向に向かって拝をして言った：「もしあの時説明されていたら、こんなに素晴らしい歓喜を感じることはなかっただろう。」 そうだ。イ山は彼の発展を奪わなかった。後に香巖はイ山の法の継承者になった。

これ中国の禪に於ける指導と伝承のいくつかの短い例を述べて置いた。

栄西禪師と道元禪師によって、禪は日本に伝えられた。

栄西明庵は子供の頃から寺に住んでいて、天台宗の伝統を熟知してから中国に渡った。老師によると、印可証明を受けるまでには中国で約八、九年間がかかった。

道元永平も子供の時に寺に入った。本当の追求は十五歳で始まったという。栄西の元で最初の突破を体験した。その後すぐ栄西は死に、道元は八年に渡って栄西の法の継承者明全のもとで修行して、そして結局その印可証明を得た。それまでの体験にまだ全然満足せず、道元は中国に行き、そこで四、五年を過ごした。如淨老師のもとで深い悟りを体験してから、二年間中国に住み、日本に戻った。

日本は、この二人の禪老師によって非常に高い水準の伝承を受けることが出来て、誠に運がよかった。その結果、日本で禪の伝統が広がり、盛んになった。

その約百年後、例えば注目すべき老師の抜隊得勝がいた。孤峰老師の印可証明を受けた後、巡礼に出た。かなりの間に、あらゆる弟子になりたい人を避けた。まだ他人を導く覚悟が深い悟りにも関わらず— それとも正にその故に— 出来ていなかった。

大勢の有名な老師の中に例えば盤珪永琢もいた。道者越元老師の印可証明を受けてから禪老師として活躍するまで、数年間にわたって社会的な生活から遠ざかって、遍歴を続けた。そして何百人の人々、坊主も居士も、男性も女性も、彼らのために導いた。

よく知られている日本の禪の老師の中に問題なく白隠慧鶴も入る。いくつかの突破にもかかわらず、老師の道鏡慧端から正式の確証を得なかったらしい。それでもその法の継承者として認められている。一七、八世紀に於ける日本の禪の修復者と見られている白隠禪師は後継者のために、ある指示を残したと言われている。聞くところによると、その中に印可証明を受けた僧は、弟子を導く前に経験を深めるために、数年間にわたって孤独な生活をするように要求されている。

こういうことは伝統であったらしい。別名大燈国師で知られている妙超宗峰は印可証明を受けた後老師の指示に従って、人々を指導するため定住する前に姿を消し、数年間乞食や庶民の間で極度の貧困の中に暮らしたと言われている。

中国と日本の沢山の他の老師も以上のものであった、例えば中国で雲門の指導者ボクシュまたは日本では一休宗純等である。

現代では例えば原田祖岳大雲老師から安谷白雲老師を経て山田耕雲老師に至るまで伝承は極めて慎重に行われ、代々にわたり深く悟った老師によって法は守られていった。知っている範囲では、耕雲老師も大悟徹底してから七、八年たって初めて他人を指導したが、その時よく安谷老師の代わりをすることもあった。同じ慎重さは山本玄峰老師から中川宗淵老師を経て鈴木宗忠老師に至る流れにも見られる。

近ごろ、老師も三雲禪堂の継承を深く慎重に考えておられることが分かる。彼と安谷老師の長年の弟子の殆どは（その中に三十年のかかわりも、真実の見識もある人がいるが）十分に水準に達すると思われぬように見える。「継承する弟子はその老師に匹敵するばかりか、老師を凌ぐものでなければ、伝統が衰える」と言われぬだろうか。

禪の長くて名高い歴史の中で今初めて西洋の国々との間に関係が始まった。というのは、初めて地球上で最も二元論的な文化の人々に出会ったということである。それはどうなるだろう。

二五年前ぐらい、日本で禪を修行する西洋人は数少なく希であった。その時、長年にわたる規則正しく、継続的な修行を焦ることなく受ける機会があった。六十年代の終わりごろ、そして特に七十年代に、日本を訪れる西洋人が益々増え、

聖職者も座禪の有用性に気が付き始めた。

この人達は皆座禪のために来たのに、彼らの目的は広く様々であったし、今でもそうである。自分は本当に何であるかを発見しようとする深い衝動、本能的な動機に動かされている人もあったし、今でもある。その中のいく人かは日本語も習ったし、数人は非常に上達した者もいる。これによって、彼らは日本の文化、この国の人々の意識という、座禪を生み育てた土壤に、ある程度まで入ることが出来るようになった。

八十年代には、ヨーロッパの人々が増々訪れ、幾人かはただの訪問者である。彼らは西洋の基盤を決して話さず、安全も決して諦めることはない。西洋にしっかりと土台を持ち、たまに日本に腕を伸ばすだけである。

禪の老師や他の精神的な伝統の指導者の話によると、ある程度までの貧困が修行に役立つが、私は貧困の基本的で、大事な面は不安だと思う。その様な不安は有益的であり、自分を放棄することをもっとたやすくする。けれども、大部分の訪問者は自分を放棄しようとは思っていないし、自分の文化が一番いいと思っているから、日本の文化に入る努力をしようもしない。しかし、ここでは「何かを貰う」チャンスがある。それは自分の目的にもよく利用できる方法である。そして多くの場合には、その目的は老師の法とほとんど関係がないように思われる。

公案ではよく「洞山は雲門の所に来た時」のような短い表現を使うが、地図で調べてみると、三千キロ位の旅だと分かる。しかもそれは殆ど徒歩で、昔の中国の荒野を渡るものであった。けれども、それは雲門にはどうでもよかった。他の指導者も、弟子が遠い所から来ても同じ態度を取った。例えば雲門は洞山を非常に手荒く扱うが、その結果として「洞山は大見性した」。(無門関一五)

従容録八十七で次のように書いてある：「曹山曰く：”四千里の辛い旅をして来て、服さえ売ってしまった。老師はなぜ、私をこう言うふうに扱うのですか。”」イ山は従者を呼んで言った：”金を持って来て、この僧にやれ。”」イ山は残酷だろうか。全くその正反対である。もし僧に同情し、それを説明しようとしたら、それは決して慈悲ではなかっただろう。

菩提達磨が慧可を試したように、弟子になりたい人を厳しく試すヒンズやスフィあるいはチベットの仏教の指導者の話も聞く。そして禪寺に入りたい人は玄関で数日間伏して待たなければならない習慣もこの名残でないだろうか。

最近、しばしば組織によって支払われた往復の切符を持って、飛行機で来る西洋人は全然違う扱いを受け、すぐに弟子として受け入れられる。時々、その短い滞在の間に、速い見性で報われる。

1987年1月11日に、老師は提唱の中で言われた：

「座禅によって、自我は段々減らされて、結局消える。しかし、ある人の場合は、自我をむしろそれで養うこともあるらしい。」（記憶によれば）。実に、これは”精神的物質主義”と言われる現象に属するものである。（これは私の1986年六月の手紙の中でも述べた。）

同じ提唱で、老師はいわれた：

「もしかすると、私は見性を認めることに甘過ぎるかも知れない。しかし、私はもう年をとってきた。」

老師の深い親切や心の暖かさ、そして彼の”与えたい、与えたい”という気持ちを疑う者は多分誰もいないだろう。けれども、この上に述べたような”甘さ”には危ない面もある。

あるドイツの大学の有名な医学部長が次のような事を言ったらどうだろう：「はるばる日本や韓国からきた医学生（中には毎年数カ月だけ来る者）を、最初の試験を早く通らせ、それからの研修をなるべく急がせて、出来るだけ早く医学博士号を取らせ、そして自分の国に戻り、自国の患者の治療に当たって貰いたい。こちらで研修している間にも、極東で患者を”古典的ドイツ医学”の名で治療するなら、私はさらにいいと思う。」そのようなことが行われたら、大変な被害がおこるのではないだろうか。そういう甘さは結局破壊的なものにはならないだろうか。まあ、これは人体に関することであるが、人間の心はその物理的な現れかたよりも大事ではないだろうか。

同じ日に、老師は安谷老師が現成公案について書いた本の中から(91頁)読んでくださった：

「それはその人の求道新が真実でなく、禅をやったと言うことを人に誇示するためか、早く禅の指導者になろうと言う慢心のためか、なにか名利につながる邪念があるから、それで、ニセモノに満足できるのである。」

西洋人の場合は他の、余分な要求もあるが、それらはみな根本的に同じだ。

大体の精神的修行の伝統で、指導者は、教えることを一番重要な目的にする人を最初から弟子として絶対受け入れない。それはなぜだろう。彼らは明きらかに他の二次的な目的を中心にしてしているので、一番本質的なもの、一大事への支配的な衝動はないからである。最初からどちらかと言うと外的行動に傾いている。老師は暁鐘203号、5頁に書いておられるように、西洋人の「...長所は外界をどこまでも追求するところ...」にある。正にその通り！最初から、他人に教えようとする支配的な欲望は「外界を追求すること」に属し、「追求する心そのものを生きたまま捕まえること」とは違う。

無論、修行中には、教えることは許されない。

後に釈迦牟尼仏になったシッダルタ王子は、人類、衆生すべてを解放する道を見つけた熱烈な衝動を感じたとき、全部を捨てて、深く自分の内面に入っていき、完全に消えた。それで彼の悟りでその深遠な探求を終えた。人類を救うために、先ず人類を忘れなければならなかった。

これは一般的なパターンであるらしい。精神的に偉大な人、そしてあらゆる道程の本当の探求者も皆、早く教えようとは思わなかった。むしろ、自分の中にある根本的な問題を解決することに完全に没頭していた。ちょうど老師は安谷老師の本を引用して、指摘されたように、人間が浅ければ浅いほど、すぐに教えたいたい気持ち強い。

しかしながら、「早く禅の指導者になろう」と思う人は、三雲禅堂で歓迎されるし、老師は高齢にもかかわらず彼らのために特に努力なさる。老師はきっと数十年前、自らの修行を、教えたいたい願望に支配されて、始められたのではなかっただろう。

そして、不思議なことに、すぐに教えたいたいと思っている、最も二次元的な文化の知識人は、一番早く見性すること、というのは、空の世界をある程度まで体験することに適しているらしい。

昔の中国や日本の名高い老師は、突破するまで長年に渡る厳しい修行を必要としたうえ、他人を指導し始めるまでしばしば数十年もかかったのは、一体全体どうしたことか。しかも彼らは菩提達磨や六祖やほかの偉大な老師のもとで修行し、彼らの熱望に遥かにあっている、西洋のと比べてずっと二次元的でない文化の中で生活していたのに...

木をある地域から別な所に植え変えると、先ず苗を植える地域の土と気候を慎重に調べる。精神的な道程の伝承の場合も同様だと思う。今までの”土と気候”はどうか、そして新しいのはどうか。

私の知る限りでは、日本は今まで非常に芸術的な国だった。(それは偉大な科学者がいなかったと言う意味ではない。)ヨーロッパ、西洋は今まで科学に支配されていた。(それは偉大な芸術家がなかったと言う意味ではない。)測定して、説明されるものなら、知ることができると納得する。こういう知識はある”隔離された閉鎖体型”に関する合意に基づいているのが見逃されるし、そして論究的な思考を利用せず、主体客体分離を乗り越える、直感知による全く違う知る道があることも見逃される。

今までの科学的知識はすべて客観化的だった。これは上述したように、意味深長に数十年前から変わる兆しがある(ルーイ・ドブローリー、ハイゼンベルグ、シュレーディンガー等参照)。しかし、一般的な人々は、無意識にこの方向にひかれながら、まだこの一步を踏んでいない。(これは大きくて、重要な題目で、何年

も前の論文の中でこれについて詳しく書いたが、ここではこれ以上論じることが出来ない。))

こういう科学に支配されている意識はすぐにヒントや説明に飛びつき、結局ヘリゲルの”親指技”に終る(”Zen in the Art of Archery”参照)。かれの弓道の指導者はそれをすぐ発見し、ごまかしと見て、ヘリゲルを帰した。

しかしながら、正直な人、というのは真実の価値感のある人にとっては、ヒントや説明はむしろ道をふさぐ。それはなぜなら、西洋の機敏な知性に話しかけて、それでまた一つの妨害になってしまうからである。

もし自分の中に注意する声がなければ、西洋人はほとんどの公案を頭だけで解決できる。時々人は”当たっている”答えを持って独参に来るのに、答えが明らかに主として知性的なものに過ぎないので、帰さなければならないことがある。そういう答えを認めると、その人の本当の発展を妨げることになる。残念ながら、西洋の精神は非常に危険にさらされて、危ないものである...

老師の自ら教えておられる西洋の弟子の大部分は聖職だから、他の違いにも触れた方がいいだろう。

確かに、カトリック教会の数多い教義に相当するものを公言し、公言することが義務付けられた日本や中国の老師はいなかった。次はそう言う教義の一つの例である：

「神の存在は自然な合理的知識の対象であるだけでなく、超自然的な信仰の対象でもある。」(De fide)*1 (英語からの翻訳)

(”Fundamentals of Catholic Dogma”, by Dr. Ludwig Ott, p.17)

”神の存在”は知識の対象ばかりか、”超自然的な信仰の対象”とさえされている。”超自然的なもの”は主体客体分離の領域にあると見なされてるのはこれで明白になる。

神学者や神父の教育の一部になっているオットの教義に関する古典的な本の随所に、”自然の物”と”超自然の物”は区別されている。私の目でみると、自然そのものは超自然であり、超自然そのものは自然である。しかも、誰が自然を測り知ることが出来るだろう。出来る者がいたら、命そのものをも測り知れるだろう。この自然と超自然の違いに関する二次元的な見解を超越することなく、どうやって快く”色即是空、空即是色”を唱えることが出来るだろう。

教会の文書のなかに、この”ただ自然”対”超自然”という区別が随所にみられる。一つの例をあげよう。

*1: De fide:法王あるいは公会議による正式の教義

”A History of Zen Buddhism”という本の中で、デュムラン神父は禪を、”超自然神秘主義”と区別して、”自然神秘主義”と名づけている。「キリスト教の神秘主義は神の恵みによるもので、本質的に超自然的である。超自然のあらわれとして、自然神秘主義より高い階級に属している。」と書いている(282/283頁)。西洋で、私はしばしば、禪を”ただの自然神秘主義”と種別する神父の話しを聞いた。その中に、自分でどこかで座禪をしている人さえいた。

デュムラン神父の書いた文章は他の意味でも面白い。大体教会は、ちょうどこの”超自然神秘主義”によって体験をした人々を迫害してきた。

何回か、老師はこの深く悟ったクリスチャンの西洋での迫害について話されたとき、次のようにつけくわえられた：「それは私にも大変危険だっただろう」。老師はちょうどその迫害された人々の言葉と一致しておられるから、多分そうだっただろう。

しかしいま、老師はトップの聖職者から親切で、おせじの手紙を受け取っている。これで、何かに気がつかないのであろうか。

ヨーロッパ人としてみると、次のことが分かる：「禪堂にくるほとんどの神父やシスターの悟りを、喜んで、そして早く許す東洋の有名な老師を見つけてありがたい。彼らの場合は、危険な精神的深さがなく、座禪は我々にとって、有益な方法として役にたつ。」

私の意見では、このことは、ほとんど老師の西洋における法の死を意味している。誠に胸が痛む。

この関係で、もう一つの教義が面白いかも知れない。

「教会の信者であることは、すべての人々にとって、救いのために必要である。
(De fide) (同上、Ott, 312頁)

数年前、これは、カトリック教会のことを聞いたことのない人を免れるように変更されたが：

「...カトリック教会のこと、そして教会のキリストを通して、神様によって定められた救いのための必要性を知っている人々は救われることができない...」

(”Handbuch des katholischen Kirchenrechts” by
Listl, Mueller, Schmitz, 1983, p.46)

そして教義：”墜落した人間は自分を救い出すことは出来ない。” (De fide)
(同上、17頁)

残念なことに、老師も救われないことは明らかだ...だが、ある条件では、その様な欠点に目をつぶってもいいらしい。

西洋人は概して、主な禪の体験に関して余り才能がない、と言う老師の話を度々聞いた。暁鐘203号、5頁に次のように書いてある。

「ここ（三雲禪堂）には外国の偉い神父様や学者の方々が多くおられますが、ハッキリ申しまして、外国の方々は、特別の人を除いて、この空の世界をご存知ないのです。」

その通り。私もそう考えている。十年以上も前に、日常生活、例えば習慣、言語、体の動き、建物、などなどに現れる東洋と西洋の意識の差を深く考慮し、東大の会話クラスでテーマにしていた。その観察一つ一つは、その文化の根本にある差を現わしている。全然疑いなく、極東の人々より我ら西洋人の方に主体客体分離が遥かに強いと思っている。それにもかかわらず、例外があって、それを述べるならかなり長くなるだろう。

そこで次のことをどうしても不思議に思う：もし、老師の言葉によれば、あの西洋の「神父様や学者は...空の世界を知らない」としたら、彼らはどうやって禪を教えることが出来るだろう。

私の目でみると、”ゼロの世界”、”不生”、無質の世界、空の世界の体験がなければ、禪はない。

老師と私の意見では、西洋人は概して客観化する知識に没頭しているので、この禪の主な体験に関して東洋人より才能がないにもかかわらず、彼らは三雲禪堂で早く見性に達し、そして速いペースで公案を通して、禪を教えることにも明らかに一番適している。

外国のある禪堂で随分違う経験がみられる。

突破は主に特別な職業とか地位の人に起こるものではない。何年も前、老師は数回私に聞いた：「どういう西洋人は禪に一番適していると思いますか」。私の返事：「芸術的な頭を持っている人」。それは必ずしも彼らの職業に反映されるものではない。私はまだそう思っている。（禪の老師は昔も現在でも内的状態を芸術で表現したのもこれを裏付けているのではないだろうか。）

確かに、あの外国の禪堂では、想像上の壁を突破した人の中に、偉い科学者や神父もいる。彼らはよくその前にかかなりの精神的な苦難や（ある大修道院長が修行している修道士についていった言葉を借りると）”劇的な変化”を経た。そういう人を大変尊敬している。

日本人は問題なくもっと才能があるのに、同じく”早い見性、速い室内、速く禪を教えること*1”という技を成し遂げた日本人は一人も見られない。知っている限り、西洋人の見性の数は三雲禪堂で日本人のそれを上回っているし、禪を教えている西洋人の弟子も日本人より遥かに多い。なぜ？それは基準を変えているか

らである。

あるインドや特にチベットの道場でも、同じ様なことがみられる。

西洋への影響はどうだろう。

この数年間、いく人かの深さも、教養も、明察力もある西洋人（その中に神父や学者も含まれる）が現在の禅の有様に関して深い失望を示すことを聞いた。例えば：

「今まで禅を大変尊敬していたが、最近ここで”禅”という名で行われているのを見て、それが変わってしまった。もしこれが禅ならば、私の尊敬の念は失われるだろう。」

または：

「このいわゆる禅の殆どはせんじつめれば、いつもあったあの昔のものである。いままた違う形と違う条件で現れたが、それ以外は同じだ。新しいゲームを古いルールで行うみたいなものだ。」

または：

「禅は概して高い水準で西洋にこなかったのは極めて残念だ。」

そうである。禅は焦りとは程遠いものだ。数年前、老師ははっきりと言われた：「熟すのが早過ぎる果物はいつまでも味がよくない。」禅の注射は西洋の組織という体によって、すぐに全然違うものに変えられる。禅の注射がエスタブリッシュメントを変えるのではなく、エスタブリッシュメントは禅の注射を殆ど禅として見分けることが出来ないものに変える。

「継承する弟子はその老師に匹敵するばかりか、老師を凌ぐものでなければならぬ」という格言は西洋人に適用されないのは明らかだ。彼らは”匹敵”は勿論のこと、”凌ぐ”ということから程遠い。これによって、禅は既に劣った状態で西洋に入ってきた。もしこういうふうになりはじめたならば、将来には何を期待できるだろう。悲しいヨーロッパよ！悲しい西洋よ！歴史の極めて大切な転換期に、禅を受け入れる機会を逃した。他の精神的修行の道を古来から歪めたように、禅も最初から歪んだ。残念、残念。日本の老師はこの歪んだ発展を承諾しないことを祈る。このたぐいの”禅”は現在必要になっている意識の変化に重要な影響を与えはしないだろう。

1)私の目でみると、禅は教えるものではなく、違う指導方法によって効果を生む。

ある時、老師は禪堂の皆の前で、要求した三物を貰った西洋人についていわれた：「彼は目のまっすぐでない人だが、権限をもって結婚式などを行いたがったので三物を上げた。」そんなに著しく西洋人に対する基準を下げるのはなぜだろう。老師は私達のことをそこまで軽視しているのだろうか。

多くの西洋人は早く西洋で”禪を教える”権限が付与される。というのは、彼らには老師の極めて貴重な法が託されるが、ほとんどの場合、彼らは本当の意味では信頼されていない（それはもったもだが）。私は今まで次のように考えていた：もし完全に信頼されていれば、権限が付与される。もし完全に信頼されていなければ、権限も付与されない。こういった私の考え方は間違えていたらしい。

今年の1月25日、”質問と答え”の時に、老師は座禪によって悩みが減少され、結局消えてしまうといわれた。それは疑いなく正しい。それにしても、ここ数年間、西洋における老師の法の悪化の為、私の中で深い悲しみが湧いてきている。この悩みは私をしだいに深く導いてくれた。そのことに感謝している。だが、これはすべてではない。何百人も、何千人もの西洋人は現在、そして将来にも、”一大事”に関する真実の発展が損なわれることに気付いていて、涙がこぼれそうになる。ある日、その一人一人は自らの死を遂げなければならない。

ある人は次のようなことを言うかも知れない：”まあ、彼ら皆は提供されているものに満足していれば、それでいいのではないか”。だが、西洋人は何百年にわたって、ほとんどの人（そうでない人も大勢いるが）の精神的価値に対する直感を減少するような教育を受けてきた。この事実を見逃してはならない。だから、彼らはラベルや肩書にこだわる。”権限が付与された禪指導”－それは西洋人にとって”いいに決っている”。

或はこういうひともあるだろう：”この西洋人はただ自分の意識の犠牲者に過ぎない”。だが、慈悲もある。もし”隣人を自分のように愛する”なら（いや、自分として愛するなら）、”あの西洋人は自業自得だ”と平気に言えるはずはない。それをみるのは非常に心苦しいものだ。その苦しさをもっと深めるのは、老師の西洋の弟子に大いに責任があるという事実だ。誠に残念だ。

少なくともこれから、伝承の基準が西洋も日本と同じになるように、老師は西洋の事情を考え直されることを心の底から祈る。そうしなければ、老師の法は西洋では違う目的の方法として使われ、ほとんど失われてしまうに違いない。法のほんのひとかけらさえ残れば、それは奇跡に近い。それ以外は、禪は西洋では流産となってしまいうだろう。

老師の耳は普通の人のように、賞賛だけを聞いて、ほかのことを聞かないとは思われないから、希望を持っている。

スワミ・アビシクタナンダという名で知られているフランスのベネディクト会の修道士・神父アンリ・ロソーはインドにいて、深い悟りを開いて、死ぬまで数十年間そこに住んだ。”The Further Shore”と言う本で次のように書いた：

「不幸なことに、精心的な体験を捜し求めている人々は、意外にもよくただの代用品、例えば禅とかヨーガのヨーロッパ版、にひかれる…」(98頁)

そうだ。”ヨーロッパ版”…(チベットの伝統のヨーロッパ版もある。)

そして：

「だが実は、(無二)の体験は、人間の歴史における現在の分岐点で、人類の解放や喜びの手段になりうるには、ふたつの言語に精通している予知者によって解釈されなければならない：その言語はウパニシャードの言葉(梵語)や予知者自身の言葉である。」(100頁)

”予知者”とは、深く悟っている人である。

アンリ・ロソー/スワミ・アビシクタナンダは”二つの言語に精通している”という表現でいたいのは、私の見るかぎりでは”二つの文化に精通している”、二つの文化の”土壌と気候”をよく知っている人、だと思う。

アンリ・ロソー/スワミ・アビシクタナンダの日記で、彼が西洋のエスタブリッシュメントの二元論から、インドの”アドヴァイタ”(無二、ひとつ)への道で、どれほど苦勞したかということが分かる。禅の仲間の場合、似ているようなこと、ゆっくりした、深い変化がみらる。そして結局、ある瞬間に、突破もおこることがある。

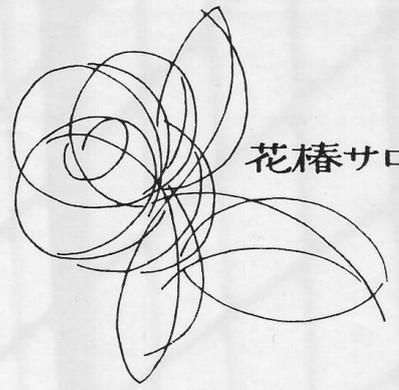
”伝承”は先ず自分の中で起こる。それはある程度までのゼロ体験によって胎動する。この体験で突然、全部が吸い込まれ、そしてその中からすべてはまた出現する。いや、”その中から”ではなく、それ自身~~自身~~現れてくる。これはもちろん伝承にかかわっている二つの文化も含める。一つであるのに、どちらもあいかわらず自分の特異性を持つ。実は、この特異性は前よりもはっきりと分かる。一四、五、六年前、老師がよくいわれたように、”枝をたばねること”はいけない。ものを混じること、あいまいなこと、悪平等もいけない。特別特異性・空のひとつ。これこそは”色・空”である。この死活の直接的な体験が欠けていると、禅も伝承もなく、にせもの、禅の死体しかない。この死活の直接的な体験はあらゆる本当の伝承の本質的な根本である。”ここからそちらへ”の伝承ではない。指導者は弟子を確証すると同時に、弟子はその体験によって指導者を確証する。これは”その場での伝承”である。

昔の伝承はそうだった。この精神は今日でも東洋と西洋の禅にみなぎっていたら、本当にいいと思っている。

鎌倉、1987年2月15日

SEEKING ZEN IN JAPAN
Interview with Brigitte D'Ortschy 1964





花椿サロン

妻を語る

親愛なる同宿人

長門裕之

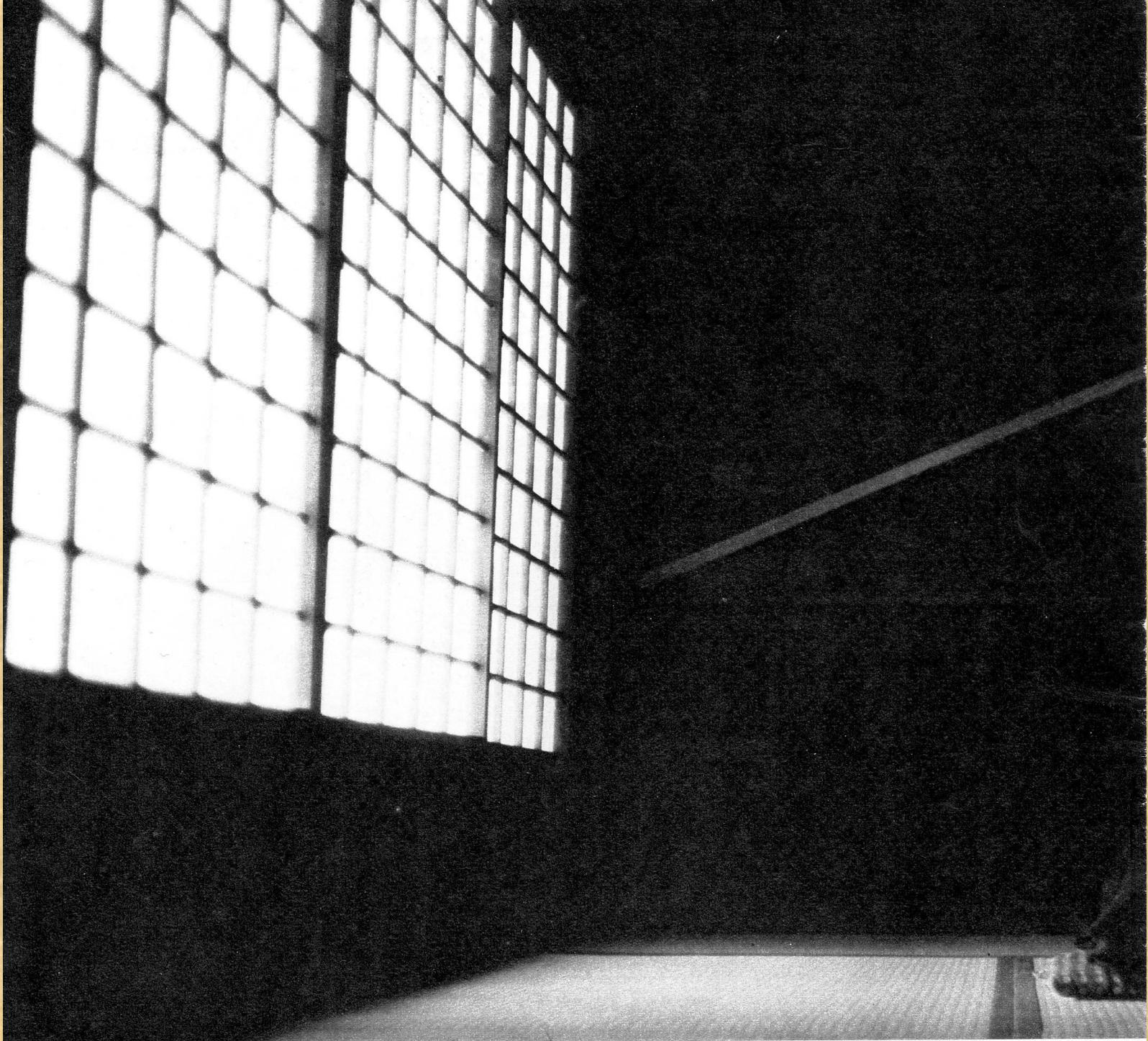
(俳優)

南田洋子夫人

すれちがってばかりいるので、かえっていつまでも新鮮な気持でいられるのかもしれないわ、といわれる洋子夫人。



**After the Japanese text, you can find the
English translation**



いた人生の目的だったのである。

ただ違うことは、ここにはとうの昔に死んでしまった数々の聖人や哲人ではなく、生きた人間の模範がいるということだ。それがどんなに大きな助けであり励ましであることか——。じつと静かに座っているまわりの道友達の熱意が、私に自分の気力の限界以上の不思議な力を与えてくれるような気がする。もし一人だったら、決してこれほど長い時間、座禅に耐えることはできないだろう。毎日の生活もそれなりに忙しい。今は、北鎌倉の、ある大学教授の離れに住んでいる。朝に夕に、その家族の方々を通して、日本の生活を胸一杯に吸収している。

建築家である私にとって、日本の伝統的建築物を見て歩くことも楽しみの一つだ。

最近、漢字の勉強もはじめた。この漢字の生きた概念が、私を抽象的な物の考え方から引き離して、いつそう座禅へとかりたててくれる。

いつの日か、私にも「悟り」の体験が得られるだろう。けれど、たとえその究極の目的はまだ彼方にあるにしても、これまで日本で学び、得たことだけでも、私はすでにむくわれたと思っている。

ベルギッテ・ドルチエ（建築家）





日本に禅を求めて

海外では、禅はここ数年来静かなるブームといわれていきます。そして、禅を求めて日本に来る外国人も少なくありません。ベルギッテ・ドルチェさんの建築家。二年前、禅の研究のためドイツから宿願の日本へやってきました。ドルチェさんは、禅について、つぎのように語ってくれました。

鎌倉、浄妙寺で座禅をくむドルチェさん

「なぜ日本にいらしたのですか？」と人はよくたずねる。そんなとき、私は簡単に「禅のため」と答えることにしている。でも、ほんとうはちよつと違う。ドイツにいたころの私は「禅」についてほとんど何も知らなかった。ただ、そこには何か、幼いときから求め続けていた真実がありそうだということを、直感的に感じていただけである。

その当時の私の気持は、かの有名なゲーテのフアウストの絶望的な心境に似ていた。物理学、医学、哲学、神学、その他あらゆる学問にほとんど手をつけてはみたものの、結局それら西洋の科学が、何一つ人生問題に解決を与えてくれないことを悟った。私は東洋へ行こうと決心した。十五年前のことだった。そして、それから十三年目によくやく目的の地、日本へ向って出発したのである。

日本へ着くと、何よりもまず一般的な日本の生活に親しむことが先決だと思い、日本式の家に日本人と生活することにした。人生なかばにして、何から何までまるで六才の幼児のように、始めから学びなおす気持だった——。言葉、習慣、理解のしかた。なかでも、まったく固くて融通のきかない西洋人の足を、何とか日本式に五時間くらいまで座れるように訓練するには、大変な苦痛をともなった。

けれども、私の本当の修業はそれから半年後、日本で十二年間禅の修業を続け、悟りの体験までした一人のアメリカ人に出会い、安谷白雲老師とその法を継ぐ山田先生に紹介された時にはじまつたといってもいい。

それ以来、私の禅の修業は、ごく自然にスムーズに進んでいる。そして、最近、私は突然自分がいつの間にか、全生涯をかけてさがし求めていた道を歩みはじめることに気がついた。禅の目的である「悟り」の体験こそ、まさに自分の求めて

Seeking Zen in Japan

In the past years, Zen has experienced something of a boom overseas. There are now not a few foreigners who come to Japan in search of Zen. Brigitte D'Ortschy is an architect who came two years ago from Germany to Japan, the fond hope of many years, in order to study Zen. She spoke as follows regarding Zen.

Picture: D'Ortschy-san practicing Zen at Jomyoji Temple in Kamakura.

People often ask me why I came to Japan. When asked that question, I simply answer, "for Zen." But actually, it's a little different. When I was still in Germany, I hardly knew anything about Zen. I simply felt instinctively that there was a truth there that I had been seeking since my youth. My spirit at that time was similar to the desperate state of Faust, that character of the famous Goethe. I had studied everything I could get my hands on, including physics, medicine, philosophy and theology. But I had to realize that none of these Western disciplines could provide a solution to the basic problem of life and death. I therefore decided to travel to the East. That was 15 years ago. And it was thirteen years later that I was finally able to depart for Japan, my destination.

Upon arriving in Japan, I felt that the first thing I had to do before anything else was to become accustomed to everyday life in Japan. Although I was already in my middle years, I felt like a six-year old child who had to learn everything in life from the very start again, whether it was language or customs or ways of understanding. One of the most trying tests for me was to get my stiff Western legs used to sitting for five hours at a stretch on the floor in Japanese fashion.

But my real practice started six months later when I met an American who had practiced Zen for twelve years and attained enlightenment, in addition to meeting Yasutani Roshi and his Dharma successor Yamada Sensei.

Since then, my Zen practice has been proceeding very smoothly and naturally. More recently, I have realized that I am now proceeding on a path that I have searched for all my life. The satori of Zen is the goal I have been searching my whole life.

One thing that is different is that I am not dealing with saints and sages who lived and died in the distant past, but with living human examples. This is a great aid and a great inspiration for me. The intensity and zeal of my fellow practitioners, sitting in silence next to me, seems to be a mysterious power that exceeds my own limitations. If I were alone, I would certainly not be able to stand up to sitting in zazen for such long hours.

My daily life is busy enough. At present I am living in North Kamakura in a small cottage on the property of a university professor. Through my contacts with this family I am absorbing Japanese life and customs all the time.

Since I am an architect, one of my special pleasures is to walk around and view examples of traditional Japanese architecture. More recently I have begun study of Chinese characters (Kanji). The living ideas contained in the characters brings me away from my abstract way of viewing things and inspires me even more to practice zazen.

Someday I might obtain the experience of satori. But even though that ultimate goal is still in the far distance, I already feel that I have been amply rewarded with what I have studied and learned in Japan up to now.

Kamakura 1964

**If this article is protected by copyright, please mail
to
maurer@wolkenverlag.de**



SAN – UN Zendo
HASANSAI 28.10.1973



罷参斎

概報

昨年十月二十八日(日)午後一時二十分よ

り、三雲禅堂にて白雲室老大師御遷化より七ヶ月目の御命日、御回向に引き続いて、導師耕雲軒老師により、泉 禅勝和尚、清水和喜長谷川弘、足立之義、ブリギッテ・ドルチイ各氏の罷参斎が祥雲軒芦田秀苗居士の司会にて次の次第のとおり執り行われました。

罷参斎式次第

- 一、拈香法語進前上香
 - 二、導師、罷参者普同三拜
 - 三、導師と罷参者と相對して三拜
 - 四、大事了畢証明書並びに絡子等授与
 - 五、導師垂誡
 - 六、罷参者代表 泉 和尚答辭
 - 七、閑雲軒宮崎慈舟居士と木村清満和尚の祝辭。祝電披露
 - 八、心経、消災呪誦誦
 - 九、普回向
 - 十、一同三拜
- まず山田耕雲老師は拈香ののち、次の法語

を唱えられました。

白雲遠去碧天秋 白雲遠く去る碧天の秋
 颯颯金風滿目悠 颯颯たる金風滿目悠なり
 忽見数鳳冲空飛 忽ち見る数鳳の空に冲して
 飛ぶを

凭門笑仰無人樓 門に凭れ笑って仰ぐ無人樓

大事了畢の証明書と絡子が、耕雲老師より

罷参者一人、一人に授与され、次いで耕雲老師より、白雲室老大師の遺誡と共に有難い垂誡がありました。

罷参者の室(軒)号、道号、法名は次のとおりであります。

元雲室大忍禅勝 泉 和尚

明雲軒歛山喜道 清水居士

如雲軒大岳弘道 長谷川居士

瑞雲軒義山道光 足立居士

皎雲庵道流智光 ドルチイ大姉

祝電は、ロス・アンジェルスの孤雲軒前角
 大山和尚、ロンドンの慈雲軒窪田巍堂居士、
 九州白雲会鹿兒島一同の三通で、随喜の居士
 大姉六十余名、堂内に一杯でありました。





